



歳時記のある暮らし

二〇二二年

《十二月》

初氷が張り小雪から大雪へと季節が進む師走のころとなりました。皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

クマやリスたちが冬眠し大自然が静けさに包まれて山眠るころ、私たちは今年締めくくりと新しい年への準備に忙しい日々を過ごします。毎日、時計を見て時間を意識しながら暮らしています。十二月だけは普段とはちがう時の流れを感じます。

八日の「針供養」、十三日の「正月事始め」、「羽子板市」、「納めの観音」や「終い弘法」と行事が目白押し。お歳暮、大掃除、年賀状、おせち料理やお年玉の準備、そして忘年会、除夜の鐘……。流行語大賞や「今年の漢字」で一年を振り返り、ちよとしたお祭りムードで慌ただしく時間が過ぎていくのが年の瀬の風物詩かもしれません。

二十日は冬至。この日にかぼちゃを食べると風邪や中風にならないといわれます。そして柚子湯に入って一年の心身の疲れをとります。柚子の香りの薬効には、身体を清める「禊」の意味もあります。太陽の力が一番弱まる冬至を境に再び力が甦ってくることから「陽来復（いちようらいふく）」ともいいます。良くないことが続いても明日からは良いことがやって来る、そんな「希切玉」を感じさせます。

東の空で冬の星座が輝き、街には大きなクリスマスツリーにイルミネーションが灯ります。クリスマスは「イエス・キリストの誕生日」と認識されがちですが、二、四世紀のころのローマ帝国で行なわれた十二月二十五日の冬至の儀式にイエス・キリストの降誕祭が重ねられたともいわれます。

クリスマスはもともと教会で礼拝する日でしたが、宗教改革で知られるルターがこれを家庭で祝うものに改めたといわれます。ルターは、木の木々の間に煌めく満天の星を見て、その美しさを子供たちに伝えようとモミの木を持ち帰りました。モミの木の枝にたくさんろうそくを飾って星降る森の美しさを再現させました。これがクリスマスツリーの始まりといわれます。

クリスマスツリーの飾りには、国によってさまざまなお考えが込められています。木や木や風に妖精がいると信じられてきたフィンランドでは、キリスト教とは関係がありませんが、家の

(裏へ続きます)

守り神であるトントという妖精に一年を無事に過ごせた感謝を込めてツリーに飾ります。ビールの国、ドイツでは、麦わらを細工して雪の結晶や太陽の光を形作り、麦を突らせた穀物の靈魂に感謝します。クリスマスが終ると、麦の飾りを焼いた灰を畑にまいて新しい実りを願います。

新しい年の幸せを願って心の煩惱を祓う除夜の鐘。煩惱が百八個あるという由来には諸説ありますが、人に迷いを与える感覚のもととなる六つの根元、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根と、人間の感情を示す好、悪、平の三つ、きれいきたないを示す淨、染の二つ、前世、今世、来世を表す三世、これらを乗算すると六×三×三×三二二百八になることから、煩惱の教という説です。他には、四苦八苦という言葉から四苦（四×九）と八苦（八×九）を足した教が百八になるという説もありません。

「煩惱即菩提」と書く煩惱は人間が生まれたときから持つ、自分を苦しめる心で大晦日に鐘を叩いて取り除いたとしても、またあらたに生まれ心に苦しみが生えます。しかしながら「煩惱即菩提」、すなわち苦しみ（煩惱）は、そのまま（即）、幸福（菩提）になるといふ、煩惱を断ちきらなくても涅槃に入ることができるといふ教えがあります。

「煩惱即菩提」は東洋的な考え方もしれません。西洋では、悪いものをなくそうとするのに対して、東洋では、悪いものを良いものに転じさせようとするところがあります。たとえば西洋医学では身体の悪い部分に直接アプローチするのに対し、東洋医学では自然治癒力を利用するなどして良い方向に転じさせようとしています。西洋のチェスは相手の駒をとって終わりですが、東洋の将棋は相手の駒をとった自分の兵力と転じます。

煩惱があるからこそ菩提を求める心が生じ、菩提があるからこそ煩惱を見つめようとしません。なくすことができないうら、煩惱をコントロールして幸せに転じさせる知恵をもちたいですね。年末年始は、感染症はもちろん、病気や事故にもお気を付けてください。

今年一年、『歳時記のある暮らし』をお読みいただきありがとうございます。

皆様、どうぞ良いお年をお迎えください。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係 お手紙担当 久郷直子

